



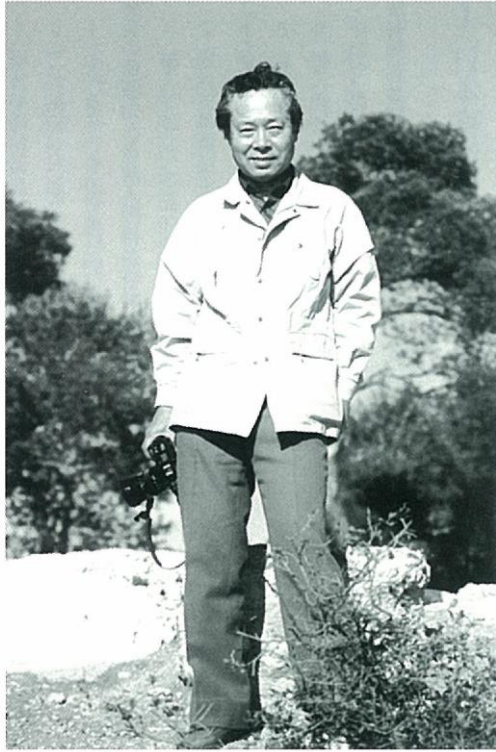
日本畜産

再生のために

—— 飼料構造と地域の視点から

増井 和夫
MASUI Kazuo





取材中の筆者（1991年5月・スペイン）

目次

I 日本畜産を見る目

家畜飼養と飼料構造を見直す…………… 2

1 はじめに…………… 2

2 輸入飼料による二大伝染病の発生…………… 3

3 肉骨粉はリサイクル資源だ…………… 4

4 輸入飼料依存型畜産の問題…………… 7

5 眠れる草資源を掘り起こし国土保全を…………… 10

6 輸入できない多面的機能…………… 11

畜産の命運決める輸入飼料依存体質からの脱皮…………… 13

1 国内畜産の存在意義が問われている…………… 13

2 二大疾病に共通する輸入飼料の汚染被害…………… 15

3 膨大な飼料貿易に伴う環境問題…………… 16

4 放牧用地に恵まれた川村牧場は例外か…………… 18

5 時代が求める放牧は多面的機能も発揮する…………… 19

6	地産地消が耕畜連携から広がる	22
	記者の目で見た戦後畜産五〇年	25
1	戦後混乱期に有畜農業の芽生え	25
2	選択的拡大の三十年代	27
3	企業の経営も出てきた四十年代	31
4	ガットからWTOへ——五十五～六十年代	34

II 土地利用型畜産再生へのシナリオ

	はじめに	38
	出直しの再生が必要な要因	43
1	計り知れない口蹄疫の影響	43
2	露呈した輸入飼料依存体質の弱点	44
3	輸入穀物加工型畜産の弊害	45
(1)	環境汚染の原因になる糞尿の過剰還元	46
(2)	飼料輸出国の環境を損なう	46
(3)	家畜の健全性を脅かす穀物多給	48

総合的な見直しから再出発を……………	49
1 世界の食料需給情勢がどうなるか……………	49
(1) 人口増加続くアジア……………	50
(2) 紛争絶えないアフリカ……………	52
(3) アメリカなどは頼りになるか……………	54
(4) 日本市場に期待するオセアニア……………	58
(5) 多面的機能で日本と協調のEU……………	62
2 海外から見るわが国の畜産……………	66
(1) 今や海外に学ぶことがないのか……………	66
(2) 質問は畜産実態より消費動向……………	68
(3) 廃棄物の買い付けは有り難いが……………	69
(4) 農産物輸入大国で農地が遊休荒廃……………	71
(5) 二桁高い人件費は世界最高……………	73
(6) 人が住める豪華な畜舎……………	74
3 白紙に戻し家畜とは何か考える……………	76
(1) 貿易協定に家畜福祉も反映……………	76
(2) 動物愛護や福祉の矛盾……………	77
(3) 家畜管理の在り方……………	79

(4) 家畜行動を把握して再出発……………	83
(5) 家畜行動と植生変化を総合的に見る……………	84
(6) 放牧強度がもたらす明暗……………	88
(7) 有機畜産物は放牧飼育で……………	90
(8) 家畜は動物であり機械ではない……………	92
草食家畜の目で土地資源を見直す……………	94
1 国家目標になつた飼料自給率向上……………	94
(1) 国内生産増で自給率低下する矛盾……………	96
(2) 酪農よお前もか……………	98
(3) 一割超した飼料作なしの農家……………	99
(4) 農用地の減少と利用率の低下……………	101
2 土地資源状況と活用方法の見直し……………	103
(1) 土地資源の現況……………	104
(2) 地域土地資源の総合的利用を図る……………	106
(3) 手初めは耕作放棄地の活用から……………	110
3 借地利用上手で飼料基盤確立……………	113
(1) 着実な飼料基盤拡大は借地で……………	113
(2) 借地から始まる新規就農……………	116

(3) 貸し手にも貢献する借地の管理的利用	117
(4) 借地を含めての面的集積	119
(5) 畜産側が先に地域貢献を	120
家畜は森の子——混牧林への期待	123
1 森林再生は一〇〇年の計で	123
2 混牧林の原理	125
3 アグロフォレストリー	126
4 混牧林の歴史	127
5 今後の混牧林の展開	130
思い切って放牧に踏み出そう	133
1 舎飼いから放牧へ家畜を馴らす	134
2 牛の選抜も新しい観点から	135
3 放牧地の整備は牛と協働で	136
4 電気牧柵を使いこなす	136
5 芝張りも牛と協働	137
6 経営全体を見直す	139
7 改めて問う畜産の本質	141

III 牛も人も野に放て——土地利用型畜産の実践

日本型放牧を先導する山地酪農——岩手県田野畑村の事例……………146

1 はじめに……………146

(1) 基本問題調査会答申と草地農業……………146

(2) 畜産物国内生産拡大が食料自給率を下げる矛盾……………147

(3) 日本型放牧へ研究も施策も強化……………149

2 先駆者の努力がようやく実り始めた山地酪農……………150

3 三陸やませ地帯の田野畑村は草地畜産でもつ……………151

4 熊谷隆幸氏の山地酪農三章……………152

(1) 猶原博士との出会いから山地酪農へ……………152

(2) 酪農三代目が帰農し経営参加……………156

(3) 二五ヘクタールの一牧区に五〇頭放牧……………156

(4) 今や懐かし二〇年間のランプ生活……………159

(5) 厳格な山地酪農牛乳の規定……………161

5 山地酪農を支える村の公社……………163

6 日本型畜産と危機管理……………166

レンタル牛が森を守り地域を活性化——林畜複合生産の宮崎県諸塚村……………168

1 育林放牧への期待……………	168
2 森林面積九五パーセントの村で増える肉用牛……………	170
3 ウッドピア諸塚の活動の一環として……………	171
4 林畜複合のかなめ、諸塚村畜産振興センター……………	172
5 普及への基礎となった共同研究……………	174
6 樹木の被害少なく家畜は健康……………	177
7 二五戸で五一ヘクタールに八四頭の実績……………	180
8 森林管理に真剣だから固定概念打破……………	181
9 無家畜林家に聞く育林放牧の実情……………	182
10 まず周辺地域から普遍化へ……………	186
11 地域から全国的普及への課題……………	188
山口県下で広がる耕作放棄地放牧——国土・景観保全に牛が活躍……………	191
1 耕作放棄地解消の意義……………	191
2 牛の舌が人手不足を補う……………	194
3 放牧を普遍化させる技術革新……………	195
4 荒廃棚田の放牧利用で先鞭……………	197
5 県畜産試験場での基礎的研究……………	198
(1) 放棄地の放牧利用技術の研究……………	199

	(2) 放牧による防火帯作り……………	201
6	県東部における実践状況……………	204
	(1) 盛況だった実証展示放牧研修会……………	205
	(2) 事例に見る実践状況……………	208
	(3) 柳井市など自治体の積極的対応……………	211
	(4) 耕作放棄地対策シンポジウム……………	213
7	今後の展開への課題……………	214
多様な林野利用畜産が展開する島根県大田市…………… 217		
1	大田市は放牧畜産のデパート……………	217
2	三瓶山における放牧の盛衰……………	218
3	林地を利用して越冬放牧に挑戦する川村牧場……………	220
4	草原管理と牛による火入れ防止帯の造成……………	225
5	林地の放牧向け貸し付けに奨励金……………	226
6	里山放牧の会と会員の林内放牧……………	227
7	放牧サミットを主催した和牛婦人部……………	229
8	二次林の放牧研究を始めた研究センター……………	230
おわりに代えて——「農林業ジャーナリスト」からの提言 古野 雅美…………… 233		

おわりに代えて——「農林業ジャーナリスト」からの提言

本書の著者である増井和夫氏が亡くなって早くも一年が経った。増井氏は、「農林業ジャーナリスト」を自称した唯一のジャーナリストだった。畜産を主なフィールドとして執筆活動を続けた増井氏がなぜ「農林業」という言葉にこだわったのか。

一九九五年に著わした『アグロフォレストリーの発想』（農林統計協会）は農政ジャーナリストの会の第十一回農業ジャーナリスト賞を受賞したが、それは農業と林業の一体的、複合的な生産システムこそが地球環境に負荷を与えず、資源循環・環境保全型の新しい農林業の一つの方向であるという明解な提言が評価されたからである。最も精通した分野である畜産についても、早くから各地の山地畜産の現場を取材し、林間放牧（林内放牧）をはじめ林野の畜産的利用を積極的に推進すべきだと提唱していた。アグロフォレストリーという言葉自体はそう新しいものではないが、それをまさに現代に適合した理論としてよみがえらせたのが増井氏であった。

日本の畜産は濃厚飼料の大半に加え粗飼料の相当部分さえ輸入に依存する「輸入原料加工型」の奇形な構造問題を抱えている。二〇〇〇年の口蹄疫、二〇〇一年のBSE（牛海綿状脳症）発生は、

この飼料問題の歪みを如実に露呈した。口蹄疫は粗飼料用に中国から輸入された稲または麦ワラが感染源であることがほぼ明らかになっている。BSEも英国起源による感染牛の肉骨粉が飼料に使われたことが最も有力視される感染ルートだ。いずれも輸入飼料が原因である。

国内に豊富に存在する稲ワラがなぜ飼料に十分利用されないのか。山野にあふれ農林業では目の敵である雑草を粗飼料になぜ利用しないのか。飼料の海外全面依存から脱却する道は自ずと明らかかなのだが、それを阻んでいるのは、低コスト、効率化による国際競争力強化というかけ声である。

しかし一方では、農林業も地球環境問題を見捨てることはできなくなった。逆に農林業の有する多面的機能をいかに発揮するかが重要な課題となってきた。海外から膨大なエネルギーを使って大量の飼料を輸入するより、国内にある資源を有効に利用するほうが環境への負荷は格段に小さい。

それだけではなく、たとえば林間放牧を考えると、低価格の外材輸入に押されて産業としての存立さえ危ぶまれている林業では、最も労力を必要とする植林地の下刈りを牛の放牧による「舌刈り」で代行する仕組みが見直されてきた。ソーラーを利用する簡易な電気牧柵の開発が普及を容易にする条件を与えた。中山間地域などで耕作放棄される田畑が激増しているが、雑草の生い茂った不耕作農地に牛を放牧して雑草を処理する仕組みが中国地方などを中心に広がりにつつある。

これらの動きは、畜産糞尿公害問題の解決や、有機・環境保全型農業への取り組み、中山間地域の

資源維持・景観保持、地球温暖化防止、家畜の健康や心理の健全化を重視する国際動向——など現代的な課題に応える新しい方向でもあるのだ。

増井和夫氏は、こうした二十一世紀の農林業や畜産が直面する新しい方向性や可能性を早くから明確に主張してきた希有のジャーナリストであった。

増井和夫氏は新潟県に生まれ、東京農工大学農学部農学科を卒業した。農学科では畜産を専攻し、寮の近くで豚を飼い、豚小屋で寝泊まりしたというほど動物好きだった。卒業後、日本農業新聞記者を経て、全国農業会議所に移り、全国農業新聞記者、同編集部長のほか全国養豚経営者会議事務局長などを務めた。早くから農政ジャーナリストの会に参加し、技術・現場の分かるジャーナリストとして活躍した。

小生は東京農工大学でわずかながら先輩にあたり、農政ジャーナリストの会などの海外を含む共同取材で一緒に農業の現場を歩きまわった。先述の増井氏の考えに心から共鳴し、同様の趣旨の原稿を書いたり講演したりした。まさに同志であった。小生が共同通信社を定年退職し、(財)農村開発企画委員会、(財)森とむらの会に勤めてからも付き合いはむしろ深まった。特に森とむらの会が中央競馬会特別振興資金の助成を受けて、林間放牧など森林の畜産的利活用に関する調査研究を五年にわたって実施した際には、最も信頼できるアドバイザーとして、また現地調査やアンケートをまとめる

研究者として、すっかりお世話になった。増井氏がいなかったらこの調査研究がうまくいかなかったことは間違いない。

増井氏が二〇〇三年五月十二日に悪性リンパ腫で逝去された後、有志により「増井和夫氏を偲ぶ会」を六月十九日に開催したところ、予想を大きく上回る一五〇人の方が参加され、改めて増井氏の人物を偲ばされた。その後、美智子未亡人のご意志もあり、増井氏が書かれた膨大な論文の中から一部を選んで遺稿集をつくろうではないかという話が持ち上がり、生前増井氏と関わりの深かった山崎農業研究所の支援のもと、この出版となった。雑誌や報告書に書かれたものがほとんどであるが、増井氏が訴え続けてきた信念と理念はしっかりと伝わってくる。本書で取り上げられている論文の初出は以下のとおりである。

I 日本畜産を見る目

家畜飼養と飼料構造を見直す・『農業と経済』二〇〇二年二月号掲載。原タイトル「家畜飼養と飼料構造を見直す——社会的なクライシスへの対応体制」

畜産の命運決める輸入依存体質からの脱皮・農政ジャーナリストの会編『日本農業の動き

No.142 再生なるか！ 日本畜産』（農林統計協会、二〇〇二年）所収

記者の目で見た戦後畜産五〇年・『畜産コンサルタント』一九九五年十二月号掲載

II 土地利用型畜産再生へのシナリオ

『農政調査時報』二〇〇〇年七月号～二〇〇一年二月号、二〇〇一年四～六月号に同タイトルにて連載。全一一回

III 牛も人も野に放て——土地利用型畜産の実践

日本型放牧を先導する山地酪農——岩手県田野畑村の事例…『畜産の情報』（国内編）一九九八年十二月号掲載

レンタル牛が森を守り地域を活性化——林畜複合生産の宮崎県諸塚村…『畜産の情報』（国内編）二〇〇一年十月号掲載

山口県下で広がる耕作放棄地放牧——国土・景観保全に牛が活躍…『畜産の情報』（国内編）二〇〇二年十二月号掲載

多様な林野利用畜産が展開する島根県大田市…（財）森とむらの会編『平成十三年度 山村地域における森林の畜産的利活用推進事業報告書』（二〇〇二年）所収

再録をご了承下さった出版社および団体、写真を提供して下さった方々、また本書の刊行にあたり、企画・編集に尽力された内山実（全国農業会議所・新規就農相談センター）、栗原幸一（麻布大学名誉教授）、松坂正次郎（全国農業共済協会・週刊『農政と共済』コラムニスト）、田口均（山崎農業

研究所・所報『耕』編集委員)の諸氏に厚く御礼申し上げます。

日本の農林業、特に畜産と林業が大きな転換期にさしかかっている現在、本書がその方向性に光を与えてくれることを念願している。

二〇〇四年五月

山崎農業研究所会員・(財)森とむらの会専務理事 古野 雅美

◎ 著者紹介

増井 和夫 [ますい かずお]

1934年新潟県生まれ。東京農工大学農学部卒業。元全国農業新聞編集部長。「農林業ジャーナリスト」として各地の畜産および林業の現場を取材。農業・畜産と林業との一体的、複合的な生産システムの視点から執筆・講演活動を行なう。2003年5月、死去。

主な著書に『アグロフォレストリーの発想』（農林統計協会）、『緊急提言 食料主権—暮らしの安全と安心のために』（共著、発行：山崎農業研究所、発売：農文協）、『肉はこう食べよう 畜産をこう変えよう—BSEを乗り越える道』（共著、コモンズ）がある。

日本畜産再生のために

— 飼料構造と地域の視点から

2004年6月30日 第1刷発行

著者 **増井 和夫**

発行 山崎農業研究所

郵便番号 160-0002 東京都新宿区坂町26 ヴィッパ第二四谷

電話 03-5379-8039 FAX 03-5379-8064

URL http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

発売 社団法人 農山漁村文化協会

郵便番号 107-8668 東京都港区赤坂7丁目6-1

電話 03-3585-1141(代表) FAX 03-3589-1387

振替 00120-3-144478

URL <http://www.ruralnet.or.jp/>

ISBN4-540-04155-X 制作／(株)新制作社

〈検印廃止〉

印刷・製本／柳澤印刷(株)

©増井美智子2004

定価はカバーに表示

Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。



9784540041556



1920061020009

ISBN4-540-04155-X

C0061 ¥2000E

定価2,100円 本体2,000円 ⑤

I 日本畜産を見る目
II 土地利用型畜産再生へのシナリオ
III 牛も人も野に放てー土地利用型畜産の実践

